

年頭聖書講筈

新しい年の新しい出発に向かって

2019年1月19日(東京 新宿)

奥田 昌道

聖書はあなた方にとって一体何なのか ヨハネ第一の手紙 ペテロ前書 ガラテヤ書 ローマ書
 第8章 生き方のモデルとしてのピリピ書 コロサイ書 ピリピ書第一章 ピリピ書第二章 ピ
 リピ書第三章 ピリピ書第四章 聖書と一つになって欲しい

●聖書はあなた方にとって一体何なのか

聖書を、皆さんはどんなふう読んでいらっしゃるか。聖書は、あなた方にとって一体何なのか。それをまた今年一年じっくり考えていただきたいと思うんです。

まだキリストを知らない時にこれから読む聖書と、キリストに救われて、いわゆるクリスチャンになった人間が読む聖書と、読み方が全く違うはずなんです。知らない時に読むときには、恐いんですね。

「審かれるのではないか、叱られるのではないか。地獄へ突き落とされるのではないか
 いか」

と。これはマタイ伝を見ましても、厳しいことがいっぱい出てくるでしょ。

「汝らの義、学者パリサイ人に優^{まさ}らざば、……」

なんて、こんなものはクリスチャンになつてからでも恐いような言葉です。そういう恐い言葉がいっぱい並んでいるような聖書に触れていく、そういう時代と、今度は完全に救われて天国人になつた、そういう立場で聖書を見ていくのと、全く違うんですよ。皆さんは、さあどつちでしょう？

「天国人になつた」

という、ここにいらつしやる方の大部分はもう天国人にされてしまっている。そしたら、

「あなたというのはこんなに素晴らしいんですよ」

ということを書いてくれているんですね、福音書も手紙も。あなたというものをつらつら生まれた時から今に至るまで、そしてキリストに出会ってから今まで、そういうものを振り返ってみたら、

「こうだろ?」

「そうです、本当にその通りですよ、万才、万才!」

と、そういう読み方に変わつていかなんといけなんでしょうね。その読み方というのは実は、ヨハネの手紙に出てきている。お気づきになりますかしら、ヨハネの手紙です。

とにかく、聖書は読むのに、旧約聖書は大変ですから、旧約は限定的に部分的で結構です。



ところが、新約聖書は——福音書それからパウロの手紙、ペテロの手紙、ヨハネの手紙——そういうものは本当に自分自身のことを書いてくれている。

「あなたというのはこうなんですよ。こんな素晴らしいものなんです、あなたは本当は気がついていないでしょう!？」

と。神さまの方からつかみかかって、

「あなたはこんな素晴らしい人間になっているんだから、そんなボヤボヤしている場合ではないですよ!」

と、そういう読み方に変わってくるんです。

●ヨハネ第一の手紙

それがヨハネの手紙に出てきています。ヨハネ第一の手紙の第3章に、

「視よ、父の我らに賜いし愛の如何いかに大おおなるかを。我ら神の子と称えらる。

既に神の子たり、

あなた方はみな神の子なんです。醜いアヒルの子ではない。もう神の子になっている。輝いている。ここにちゃんと書いてある。世間が私たちを知らないのは、父なる神さまを知らないから、これはしょうがないだろうと。

世の我ら知らぬは、父を知らぬによりてなり。愛する者よ、我等いま神

の子たり、

ああ、もう神の子か。では、これからどうなっていくんでしょうかと。

後いかん、未だ顕れず、

まだそれは顕れていない。

主の現れたもう時われら之にに肖にんことを知る。

「そっくりさんになる」と書いてある。それに似るようになる。あの栄光のキリストのお姿に我々は変貌するんです。ちゃんと——「私はどう思うか」とかではない——神さまの側からこうやって宣言しておられるんです。

「御言みことば、御言」というけれども、御言は必ず成就する。ザカリヤ、エリサベツもそうでしたね、マリヤさんもそうでした。シメオン老人もそうですよ。みんな御言というものは必ずそれが成就する。ここでも、

我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、主の現れたもう時われら之にに肖にんことを知る。

主の現れたもう時、われらはそのそっくりさんになると。「現れたもう時」というのは普通、「再臨の時」と言われていますけれども、私はそう思っていない。

「私がこの世を去って、すぐ主にお会いする。その主にお会いする時に、主の栄光の姿に我々は、私は変貌させていただく」



と。普通の人は、まぶしくてすぐに主にお会いできないですよ。でも、私たちは日頃から親しんでいるから、眩まばゆくないんです。日頃、地下に潜もぐっている人間はいきなり太陽の輝いている所に行ったら、目がつぶれますよ。ところが、日頃から光の中にある者は、その光に会うと

「あつ、これが本ものの光か。ああうれしい。内なる光と天の光は本当に素晴らしい」と、そういうふうになるはずなんです。非常に聖書に書いてあることは合理的です。

「不合理なるがゆえに我信す」

とか何とか、誰か哲学者が言っているのは、それはバカ者ですよ。不合理でも何でもありません。神さまの理にかなっている。神さまの理と、この地上の理が違うだけです。それがヨハネ伝の3章のニコデモとの対話のところに出てきます。ニコデモは、土から生まれた人間というレベルで話している。ところが、キリストは、

「人は上から生まれなければ、人は新たに生まれずれば、神の国を見ることあ
たわず、神の国に入ることあらわす」

と、ちゃんと仰っている。そうでしょ。だから、キリストは、

「私が語った言葉は霊であり生命である。肉は役立たない」

と言う。「肉」というのは生まれながらの人間です。生まれながらの人間というのは、そのままだったら、また土に還るだけです。ところが、その土に還る前の百年間に天なるものを受けとったら、天の次元の人間に変貌するわけです。それが、キリストが我々に一番願っていることですよ。

「あなた方はもう世のものではない。私が世からあなた方を選びだした」

と、ちゃんとキリストはお別れのところで言っておられる。ヨハネ伝14章から16章まで、あれはキリストの遺言ですから。誰でも、これからお別れという時に大事なことを語るはずでしょ。14章から16章は、キリストが弟子たちに滾こん々と、

「自分が去ったあと、あなた方はどうなるのか」

ということを言っておられる。そういうふうにして、本当に聖書というのは、神さまがキリストを通して私たちに語りかけて、

「これでもか、これでもか。分かったか。本当に我をくまえ、我を飲め。私と一つ
になれ」

と言われたでしょ。そのぐらいに、聖書に親しんでほしいんです。いろんな本を読む必要はない。聖書そのものを、それも福音書、それからパウロ書簡、ペテロ書簡、ヨハネ書簡、これを渾然一体として受けとって、

「私自身が聖書である」

というぐらいになって欲しいんですよ、私の皆さんに対するお願い、抱負は。それだけのものを与えたいんです、神さまの側からは。



私は今朝もホテルでこちらに来る前に、ピリピ書を読んでいたんですけども、ピリピ書を読んでいたら、もうグングン響いてきますね。

「ああ、パウロの思いは素晴らしい!」

と。私はかつてみんなに、

「ピリピ書は京都キリスト召団に与えられた書だ」

と言った。わずか4章しかない。一気に読んでしまいます。何度も読んでいたら、大事なところだけ拾い読みできます。そのパウロの気持ちがあるもの凄く伝わってくる。

「聖書はどう言っているか」
ではなくて、

「私の思いが聖書に全部書いてある」

と、こういうふうになって欲しいんです。

「私の生き方、私はどんな人間かは全部、聖書に書いてある。私は口べたで、うまいこと言えんけど、私が神さまの目から見るとどんな人間であるか、どうやって救われ、今どこへ向かっているか、どういう生き方をするか、それが全部、聖書に証あかしされている」

ということ。イエスは言われたでしょ、

「聖書は我につきて証あかしするものなり。それにもかかわらず、あなた方は旧約聖書の研究ばかりして、本ものである私が目の前にいるのに、私を退けている。モーセはそんなことはしなかつたよ」

と、ちゃんとやっておられますよね。今度は私たちは、キリストのゆえに十字架・聖霊をいただいて、十字架を通して聖霊をいただいて、神の子にされている。

「我等いま神の子たり。その姿はこんなものだ」

ということが聖書で証言されている。だから、

「聖書は教えである。聖書によればどうだ。聖書は遠いところから自分を審く。聖書は我々を導いていく」

とか、そんな他人ごとではなくて、自分のことを書いてくれているということ。

「お前はこんなに素晴らしいんだ。あなたは素晴らしいんだよ」

という、そういうことを聖書は語ってくれている。それがこのヨハネのここです。

「愛する者よ、我等いま神の子たり、

もう既に神の子だと。では、これからどうなるのか。はい、主が顕れてくださる時に主のそっくりさんになりますよと。

後いかん、未だ顕れず、主の現れたもう時われら之に肖にんことを知る。我ら

その真まことの状あひだを見るべければなり。」(ヨハネ一3・2)

今はイエスさまを見てないですもの。どんなに頑張ったって、イエスを見ていない。けれ



ども、その時には主を見る。そうしたら、主のそっくりさんに我々は変貌する。

●ペテロ前書

同じことは、ペテロの手紙にもある。こういうところを読んだら、すぐペテロの手紙を読みたくなる。ペテロ前書です。全部つながっていますよ、ペテロもヨハネもパウロもみな一緒なんですよ、大きな意味でね。ペテロ前書1章3節から、

「³讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫におおい 随したがい、イエス・キリストの死人の中より甦あたらえり給えることに由り、我らを新あらたに生れしめて生ける望のぞみを懐いだかせ、

キリストの復活があるから、我々も復活できる。キリストは罪を全部片付けてくださって、そして一度は地獄に落ちて行かれた。それから、あの栄光の姿で甦たれた。その時に、「もうあなた方の罪なんて全部片付けたから心配はいらん。あなた方はもう今は胸を張っていいんだよ。神の子だよ」

と、そう言ってくれているんです。だから、
我らを新あらたに生れしめて生ける望のぞみを懐いだかせ、⁴汝らの為に天に蓄えある、朽くちず汚しれず萎しばまざるしぎようつ 嗣業しぎよを継つがしめ給えり。

天国を受けとるものにしてくださった。

⁵汝らは終おわりのときに

「終おわりのとき」は「最後の審判」を指しているんでしようけれども、我々は、この世を去ってキリストに出会う時に、

頭あたまれんとて備そなりたる救すけいを得んために、

まだ地上では仮の姿ですよ。パウロだって、

「いかにもしてキリストと同じ姿に変貌したい。それを求めて前に向かって進もう。

後ろのものを忘れ、前に向かって体を延のばす」

とパウロも言ってますよ。

信仰によりて神の力に護らるるなり。

この地上では、我々は神の力、キリストの力、聖霊に守られて旅をやっている。当時は迫害もありましたから。ネロの迫害とか凄いでしょ、クリスチャンの殉教というのは。

⁶この故ゆに汝ら今いましばしの程ほどさまさまの試煉しころみによりて憂うれえざるを得ずとも、な

お大おおいに喜よろこべり。

試練がくればやっぱり憂いもありますよ。でも、それを乗り越えて、あなた方は大いに喜んでるね。クリスチャンが大いに喜んでいなかったらダメなんです。この世のことにかまけて、萎しおれていたらダメです。何が来ようと、それを突き抜けて、

「われ既に世に勝てり」



という在り方を現していけないとね。ちゃんとここに、

「あなた方はさまざまの試煉によりて憂えざるを得ず」

とある。今は迫害なんてないでしょ。病気とか、いろんなものがあるかもしれませんが、貧困とか、いろんな社会的なことがあっても、信仰による迫害なんて、皆さん、会ってないはずですよ。ありがたいことに、憲法で信教の自由が保証されているし。だから、いよいよ燃えていかないと申し訳ない。あなた方はなお喜んでいるねと。

7 汝らの信仰の験は、壊つる金の火にためさるるよりも貴くして、金よりも素晴らしいんだと。金は精錬されて純金になっていく。それより以上にあなた方はさまざまな試練によつて鍛え上げられて輝いていくんだと。

イエス・キリストの現れ給うとき誉と光榮と尊貴とを得べきなり。

と、ちゃんとここに書いてある。今はまだ醜いアヒルの子でも、やがて素晴らしい姿に変貌すると書いてあるでしょ。

8 汝らイエスを見しことなければ

そうです、私も見たことはない。でも、

之を愛し、今見ざれども之を信じて、言いがたく、かつ光榮ある喜びをもて

喜ぶ。

クリスチャンがこの姿でなければ、まだ本ものではない。

9 これ信仰の極、すなわち靈魂の救を受くるに因る。（ペテロ前1：3～9）

ちゃんとここに、「我々はこんな姿だ」ということを証言してくれている。だから、聖書に書いてあることは他人ごとではない。自分のことを、自分はうまいこと表現できないけれども、聖書にみな書いてくれてるんだと。だから、

「私という人間を本当に知りたければ、聖書を読んでね」

と、こういうふうに言えればいいんです、恋人に対しても（笑）。いやいや、老年でもいくらでも恋をしてくれたらいい、聖なる恋を。クリスチャンは、いろんな人をキリストに導くためには、聖書を通してつながっていけば、これは聖い交わりですからね、何十人恋人がいたって大丈夫ですから。

そんなことがペテロの手紙に出てくるし、このペテロの手紙で、

「あなた方は祭司である。素晴らしい」

と、いろいろペテロ前書に書いてくれています。それから、4章にきたら、

7 万の物のおわり近づけり、然れば汝ら心を慥にし、慎みて祈せよ。8 何事

よりも先ず互に熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩えばなり。9 また吝むことな

く互に懇ろに待せ。

云々と。我々にとつて必要なことが全部書いてあるんですよ。それから、火の如き試練がやってきても、ビクともしないと言つ。



12 愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試煉を異なる事として怪し
まず、

「エライこつちゃー！なんてあやしむな。「味わったことがない、エライこつちゃー！」なんて
思うな。そういう苦難にあずかればあずかるほど喜べと。

13 反つてキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れ
ん時にも喜び樂しまん為なり。14 もし汝等キリストの名のために謗られなば
幸福なり。栄光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上に留り給えばなり。」（ペ
テロ前4・7〜14）

本当にこういう生き方をなさってくださいば——いろいろ身内のことだとか、老々介護だ
とかあるでしょう——でも、私はある意味で言いたい、

「人は自己責任である」

と。これを忘れては困るんです。

それは飛びますけれども、ガラテヤ書を見てください。人の人生というのは、自分で自
分の人生に責任を持たなければいけない。そういうふうには教育しないといけない。

「人に頼るのではない。自分で自分の生涯の責任を持って生きなさい」

「病気はどうするの？」

「その時は祈りなさい」

と。とにかく、基本は、自分の人生は神さまから賜ったもので、自分で責任をもって歩ん
でいく。でも、早くからキリストにすがっていく人は幸せです。

「私は自分でやる」

と。いつてやっている人が、ひとつ凄い壁にぶつかった時、なかなか立ち直れない。しかし、
弱いようで、我々はキリストにすがっている人間は、何がきてもビクともしない。けれども、

「私は自分の力でやる」

とやっている人は、本当に大きな壁にぶつかって、倒産とか、その他、大災害があります、
いろんなことがあります。津波や火事から命からがら逃れた。あとには何も残らない。絶
望だと。しかし、クリスチャンは絶望しないでですよ。

●ガラテヤ書

ガラテヤ書に、

「人は播いた種を刈り取る」

とはつきり書いてある。こういうものを我々はつきり告白していかないといけない。単
なる同情ではない。人は播いた種を刈り取る。

「エライこつちゃ、自分は肉にばかりまいてました」

と。でも、今からでも遅くない。



「さあ、キリストにすがりましょう」と。
「こういうふうな持っていないかね。何でも

「ああ、よしよし」
ではない。」

「まず自己責任だ」

ということをはつきりしてほしい、およそ普通の大人ならば。子どものときから、中学も高校も大学も、そういう面で自己責任をまずたたき込んで、それで、やれない人には助けを出す。ガラテヤ書6章7節に、

「^{あざむ}自ら欺くな、神は^{あまど}悔るべき者にあらず、

神を神とも思っていないやつがたくさんおるわけです、青年どもは。それに対してガラテヤ書は、

人の播く所は、その刈る所とならん。

つまり、播いた種を刈り取るんだと。

⁸己が肉のために播く者は肉によりて滅亡^{ほろび}を刈りとり、

多くの人は肉のために播いている。自己中心で己が欲望で「私、私、私」と。ところが、聖書は逆を言ってますね、キリストは。

「己^{おのれ}を棄て、己が十字架を負いて我に従え。己が命を救わんと思うものはこれを失い、わがため福音のため己が命を棄ててかかる者は永遠の生命を得る」

と、はつきり言っておられます。ここでは、

「人の播く所は、その刈る所となる。肉のために、自己中心的に自分のために播く人は肉によりて滅亡を刈り取る」という。

御霊^{みたま}のために播く者は御霊によりて永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}を刈りとらん。」（ガラテヤ

6・7〜8）

とちゃんと書いてますよ。私はこれをはつきり言っていきたい、宣言していききたい。「ああ、よしよし」ではない。まずこれなんです、原則は。それに照らしたら、

「ああ、私は肉に播いてきた。悪かった、どないしようか!？」

「キリストが助けてくださるよ。気付いたらいいんだよ。キリストはあなたのマイナスを全部背負ってくださったんだ。何でキリストは十字架にかかったのか。あなたの方は祈っていれば、眩い姿になつてすぐ天に昇ってしまうお方だよ。それがあの十字架の苦しみを味われたのは、その肉に播いていたものの罪、その結果、滅びをみな自分のものとして引き受けてくださったんだよ。えっ？ 分かっているの？ あんた!」

と、こういう感じですよ。ガラテヤ書2章20節、



「²⁰我キリストと偕ともに十字架につけられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。²¹我は神の恩恵めぐみを空しくせず、もし義とせらるること律法おきてに由らば、キリストの死に給えるは徒然いたすらなり。」（ガラテヤ2・20〜21）

私はキリストの十字架をむだにしたくない。もし十字架以外で命が得られるのなら、キリストは無駄死にされたことになる。十字架でキリストは私のマイナスを、死をも滅ぼしてくださった。だから、キリストの生命が来たら、死なない。肉体が滅びても私は永遠に生き続ける。天に昇ったら、今度は天使になって、また世の人を助けますよ。天に昇った人はみなそれをやっているはずです。天地一如なんです。聖書はそういうことをはつきり宣言してくれている。

●ローマ書第8章

片一方は肉。「肉」は自己中心。「霊」は神中心。ローマ書は、8章のところで「霊と肉」ということを書いてます。肉に播く者は平安がない。神に逆らう。霊の生き方をする者は生命なり平安なりと。ローマ書8章、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは、なんじを罪と死との法より解放ときはなしたればなり。

キリストに來ない人はみな、「罪と死の法」の中にがんじがらめにされている。それに氣付いていないだけなんです。

³肉によりて弱くなれる律法おきての成し能あたわぬ所を神は為し給えり、

律法というのは人に努力を求めた。ところが、人間は努力、自分の力ではどうにもならなかった。それを思い知らせるために、律法は与えられた。律法ができなかった、モーセの律法ではどうにもならなかった、それを神さまはキリストを通してやってくださった。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣つかわし、

生まれながらにキリストは私たちの罪を背負うために、この世に生まれて來られたようなお方です。シメオン老人がマリヤさんに言いましたね。

肉に於て罪を定めたまえり。

このお方において、キリストの御体において罪を定めたもうた。これはコリント書にも出てきます。罪なき方を罪としたもうた。これによって我々は救われたと。

⁴これ肉に従わず靈に従いて歩む我らの中に、律法おきての義まことの完まうせられん為なり。

本来、モーセの律法を通してねらっていたことが、律法ではどうにもならなかった。しかし、



本当の律法の求めているところをキリストは成就された。キリストは律法の中に生まれていながら、律法を乗り越えた。律法は神の御意の表れなんですよ。それを己が力でやると、ダメなんです。キリストは神さまに委ねきっていますから、神さまから出てくる律法の意^{こころ}を本当に受けとつて、それを生き抜かれた。

4 これ肉に従わず靈に従いて歩む我らの中に、律法の義の完うせられん為なり。
と。聖書はどこを読んでも、全部つながっていますから。小池先生は、

「聖書は楽しくてしょうがない」
と、よく言われましたね。

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」
とも言われました。聖書と小池先生は一つになっている。私もなんかそういう境地に今なつてきたんです。

「ああ、聖書は私の思いを代弁してくれているなあ」
と。初めは、

「聖書に習わなくてはならない。聖書の求めているところに行かないといかん」
と思つた。今は、

「あつ、私の言いたいことが全部書いてあるではないか」
と。本当に皆さん、そうなつて欲しいんですよ。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣^{つか}し、肉に於て罪を定めたまへり。
キリストを罪ある肉の形で、我々の罪のために遣わして、そのキリストの肉において、罪を定めてくださった。

4 これ肉に従わず靈に従いて歩む我らの中に、
御靈に導かれたらもう律法を乗り越えていくんです。律法が本来ねらつていたところを、御靈は実現してください。

律法の義の完^まうせられん為なり。
律法が本来ねらつているところを、キリストが我々のマイナスを全部背負つてくださつて、御靈を送つてくださると、今度は楽々と律法を乗り越えて、本当に神の御意にかなう生き方に変えられる、天国人にされてしまう。

律法の世界はまだ地上の人なんですよ。地上の人で、自分が肉の姿でいくら律法を全うしようとしても無理なんです。しかし、変貌したら、もう楽々と律法を超えてしまっている。それは御靈の世界なんです。そういうことがここに書いてある。

5 肉にしたがう者は肉の事をおもひ、靈にしたがう者は靈の事をおもう。

我々はキリストによって本当に変貌するまでは、肉の人なんです。キリストによって変貌してしまえば、靈の人なんです。肉に従う間は肉のことを思っている。靈、キリストの靈に従う者は靈のことを思う。



これはニコデモさんとキリストの対話で全然、次元が違いましたね。

「そんなことがあるんですか？」

なんて、ニコデモは言っている。

「風は思いのままに吹くではないか」

とキリストは言われた。ヨハネ伝では、

「人の子は挙げられなくてはならない」

「神はその独子を賜ったほどに世を愛してくださった」

と、これはつながっているでしょ。ここにも、

⁶肉の念は死なり、霊の念は生命なり、平安なり。

「生命なり、平安なり」なんですよ、本当に。「平安、汝にあれ」という。皆さんはいろんな苦勞をなさっている。老々介護とかなさっている。でも、キリストは、

「汝ら、世にありては患難あり。されど雄々しかれ、我既に世に勝てり」

と、常にキリストは勝利宣言してくださっている。何がきても、ヘコたれない。パウロもそうでした。あのパウロの大変な苦難を突き抜けて、凱歌をあげているでしょ。そういう境地に本当に皆さん、入っていただきたい。聖書に向こうで見ているのではない。もう自分がその中に入ってしまったって、

「あ、私のことをここまで言ってくれている。これは凄いわ」

と、そういう読み方です。ここにも、

⁵肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。

⁶肉の念は死なり、

ああそうでしたと。

霊の念は生命なり、平安なり。

だから、新しく生まれないといけない。新しく生まれるために、キリストは十字架を背負ってくれた。そして、ご自分が我々のマイナスを全部引きとって、キリストの復活の生命、神に従う生命、御霊の生命、これをくださった。それで、新しく生まれたら、これは神の子ですから、神の子は神の御思いと一つになっていけるわけでしょ。だから、

⁷肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、

従うことができないんだと。

⁸また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。

即ち、肉に居る者は神を悦ばすことは不可能だと。

⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん

「しかし、神の御霊があなた方の中に宿っている以上は、あなた方はもう肉の人で

はない、霊の人だよ」

と。ちゃんと書いてある。「霊と肉」というのはヨハネ伝の専売特許ではない。ここにちゃ



んとパウロも、

「あなた方は、御霊が宿ってくださっているならば、あなた方はもう肉の人ではない、
霊の人なんだ」

と。そして、

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

「キリストの御霊なき者はキリストチャンではない」

と畳みかけている。「御霊なきクリスチャン」というのは自己矛盾です。人形なんですよ。御霊があつて初めてクリスチャンなんです。

「キリスト者とは何ですか？」

「はい、御霊をいただいた者です。旧き我は死んで、御霊をいただいて生きている

人間、天国人です」

と。自己紹介の時に、

「はい、私は天国人です」

と言う。人は、

「えっ!？」

と驚く。そうでしょ。

「私はもう死にました。旧い私は死にました、『われ主と共に十字架せられたり。

もはや我生くるにあらず。キリストわがうちに在りて、生き給うなり』というこ

とですよ」

と。これを自己紹介の時にやってください、皆さん。人は驚きますよ。

「然れど神の御霊があなた方の中に宿り給う以上、あなた方はもう霊の人だ。キリ

ストの御霊がなかったらキリスト者ではないよ」

と。御霊のキリストがあなた方の中にいらつしゃれば——体はどうせ死にますよ、この体

は——でも、霊はもう永遠の生命の中に生きている。

それは死なないで変貌して、いきなり天へ昇っていったら、凄いです。パウロは「そ

うなりたい」と言っているけれども、エノクとかエリヤとか、そのくらいですよ、肉の体

が変貌して天に昇って逝つたのは。他の人は小池先生だつて誰だつてみんなやっぱり、

「われ土の器に宝を有てり」

でしょ。だから、土は土に還る。けれども、土の器でありながら、中に宝を有てりと。パウロは、「土の器に宝を有てり」と言っている。その御霊の生命という宝を持っている。これが私の霊と一体になって、私の霊を包み込んで、そしてこの世を去る時には、スーツと向こうへ連れて行ってくれる。それを持っていない人は亡霊ですよ、お墓で彷徨さまよっているかもしれない。だから、小池先生は言われましたよ、

「小さい子をお墓に連れて行ってはいかん。さ迷っている霊がくつつくから。そう



すると、病気になる」

と。それは本当だと思えますね。浮かばれない霊がいつぱいおるんだって、お墓には。こっちはクリスチャンで御霊がきていたら、

「あなた気の毒ね、お祈りしてあげるから、一緒にキリストへ行こう」

というくらいゆとりをいただけるけれども、中途半端な段階であまりお墓に夜なんか行ったら危ないです、それは変なものがかくついたら。

霊界というのは、我々は見えないだけで、たえず入り乱れているんです。電波は、皆さん見えないでしょ。もの凄く電波が飛び交っている。携帯を持ってみんなやっている。あれはようぶつからんと思う。それと同じように、霊界というのはもう我々の中に充満しているんですよ。だから、チャンネルを合わせたらパアーツとそっちへいく。だから、サタンの霊にチャンネルを合わせたらエライこっちゃ。そういうことですよ。

10 若しキリスト汝らに在さば、体は罪によりて死にたる者なれど、霊は義によりて生命に在らん。11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

体は罪で死んだけれども、霊は義によりて生命にある。そして、キリストを甦らせてくださったあのお方の御霊が、神の霊が我々の中に宿ってくださるならば、そのキリストを復活させてくださった神さまは、あなた方の中に宿っておられる御霊によって、汝らの死ぬべき体をも活かし給う、とちゃんと書いてある。キリストは、

「我は復活なり生命なり。我を信する者は死すとも生きん。およそ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし」

と、マルタとマリヤに仰った。そのことをちゃんとパウロもここで言ってくれている。

12 されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。

さっきのガラテヤ書で、「肉に播く者は肉から滅びを刈り取る」とちゃんと書いてある。

13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。

「肉に従いて活きなば死ぬ」とちゃんとここに書いてある。死ぬべしと。

もし霊によりて体の行為を殺さば活くべし。

「体」というのは自己中心ですから、欲望を持っていますから、そいつに任せっぱなしにしたら、クリスチャンといえども危ない。やつぱりそこはコントロールしていかないとダメだから、霊によって体の行いを殺すならば活きると。

14 すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。

と。神の子宣言をしてくれているんです。ヨハネだけではないですよ。



15 汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらざ、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。
子たる身分を授かった。子としての霊を受けた。子としてなら、「お父ちゃん！」と呼ぶんです。

16 御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。17 もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。」(ロマ8・1～17)

私たちが神の子であることをちゃんと御霊ご自身が証明してください。子どもだったら、天国を受け継ぐ世継、キリストと一緒に共同相続人だと。

「これはキリストと共に栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」と。キリストと苦しみを共にすることを嫌がったらダメなんです。ここにちゃんと書いてあるでしょ。

●生き方のモデルとしてのピリピ書

ピリピ書をちよつと見てください。私は我々の生き方のモデルとしてピリピ書を推薦したい。ピリピ書に従っていけば間違いない。毎日でも読んでいただきたいような書簡です。その中の大事なところだけをマークして、それを拾い読みしたらいい。

まず1章20節、パウロは今、繋がれている身、囚人なんです。ところが、にもかかわらず、パウロはどんなことを言っているか。

「これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく

囚われの身であっても自由な身である時と変わらないよと。

聊かも臆することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、また望むところに適えるなり。21 我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」(ピリピ1・20～21)

これですよ、我々の生き方は。

「生くるにも、死ぬるにも、この身によりてキリストの崇められ給うように」というキリスト中心の生き方。自分の欲望を満たすとか、

「自分はこういう野心を持っているからこれをやらしてくれ」

とか、そういうのが表に出るのではなく、まず、

「キリストの御名の栄光の現れんために」

ということですよ。

「では、あなたはこの仕事をやってごらん。応援するから」

「はい、やります！」



と。そうしたら、

「栄光神に」

と、こうなる。そうではなくて自分の欲望を満たすために、

「神さま、助けてね」

と、これは逆ですよ。それは神さまを自分の子分にしてしているわけだ。この世の人はだいたいそうでしょ。お宮参りするの全部自分の欲望を満たしてくれるため。勉強のためなら菅原道真すがわらみらさねの所へ行く、お産のためなら出雲大社へ行くとか。みな分業でしょ、日本の神さまは。全部、自分のこの世の欲望を満たすためにお参りしている。我々は違う。我々は、

「生くるはキリスト、死ぬるも益なり。この身においてキリストの崇められ給わんことを」

というのが我々の願いなんです。まるでこの世の人と逆なんです。それをはっきりしてほしい。

「あなたは何を目指して生きていますか？」

「はい、この身を通して、キリストの、神の御意が成るように。御名が崇められんために」

と。「主の祈り」がそうでしょ。

「御名みなが崇められんことを」

という。

「御意みこころの天に成る如く地にも、この身を通して現してくください」

と。みな神中心の生き方をしますね、主の祈りも。ここも、

「聊いささかかも臆することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、また望むところに適かなえるなり。21我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」（ピリピ1・20～21）

と。こういう突き抜けた姿、これを証明してほしいんです。

お正月からのいろんな番組を見ても、こんなことを言うているのは全然ありませんわ。この世のことばかりですよ。しょうがないね、テレビなんか。でも、我々は、

「もう既に死にたるものにして、あなた方の生命はキリストと共に神の中に隠されてあればなり」（コロサイ3・3）

と。これはコロサイ書3章です。ピリピ、エペソ、コロサイのこの三つは一つのまとまりなんです。共通性があります。エペソ書が一番整っていますけれども。

●コロサイ書

コロサイ書3章、

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、



あなた方はもうキリストと一緒に甦えらされた。

「あなたは死んでいるのではない、死につばなしではない。キリストと一緒にもう甦えつたんだよ」

と言っている。「もし」と書いてあるけれども、これは「である以上は」ということ。

「あなた方はもう既にキリストと一緒に甦えらされた存在なんだ。だったら、この世のことを求めるのではない。天のものを求めるのは当たり前でしょ、天国人なんだから」

と。天国人ならば天国のことを求めていく。肉ではない。霊なるものを求めていく。そういうことですね。

キリスト彼処かしこに在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを念おもい、地に在るものを念うな、

とちゃんと書いてある。

³汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

これが我々の本当の姿だよという。

⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。

キリストが現れてくださる時、あなた方も栄光のうちに、キリストのそっくりさんみたいな栄光の姿で現れてくる。こういう大希望を与えられて、もうあなた方は醜いアヒルの子ではないんだ、素晴らしい白鳥の子だ。だったら、この地上のつまらんことに、もうかかずらあうなど。そんなものは捨てて、神の子らしく生きようではないか、と励ましている。

⁵されば地にある肢体したい、すなわち淫行・汚穢けがれ・情慾・悪慾・また慳貪むさぼりを殺せ、慳貪は偶像崇拜なり。⁶神の怒は、これらの事によりて不従順の子らきたに來り

なり。⁷汝らもかかる人の中に日を送りし時は、これらの悪あしき事に歩めり。

あなた方もかつてはそういう時を送っていたよねと、ちゃんとみな書いてあるんですよ。あなた方もキリストに救われる前はそうだったと。しかし、もう今は、

⁸されど今は凡て此等のこと及び怒・憤恚いきどおり・悪意を棄て、

これは全部、肉の姿ですね、そういうものは棄てて、

謙そしりと恥おこずべき言ことばとを汝らの口より棄てよ。⁹互いつわりに虚言うそをいうな、汝らは既に旧ふるき人とその行為おこないとを脱ぎて、¹⁰新あらたしき人を著きたればなり。

新しい人を着たんだよと。成人式でみな新しい着物を着てますね。成人式ではないけれども、キリスト式です。キリスト式をやってもらって——

「旧ふるい上衣うわぎよさようなら」

と、あの「青山脈」にありましたね——ちゃんとあなた方は、旧ふるき人とその行為おこないとを脱



ぎつ、

10 新しき人を著^きしたればなり。この新しき人は、これを造り給いしもの^{かたち}の像に
循^{したが}い、

これはキリストですよ、キリストにならうように、

いよいよ新になりて知識に至るなり。

ここで言っている「知識」というのは「奥義」「ミステリオン」という神秘へつながって
くんだと。もうそうなるよ、

11 かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは夷狄^{えびす}、スクテヤ人・

奴隷・自主の別^{わかち}ある事なし、

そんな区別はないよ。

それキリストは万^{よろず}の物なり、万のものの中にあり。

我々はこういう姿だよと。「だから」と続いてくる。

12 この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・

仁慈・謙遜・柔和・寛容を著^きよ。

あなた方は神に選ばれた民で、聖なる者また神さまに愛されている者だったら、慈悲の心・
仁慈・謙遜・柔和・寛容は当然、身につくよねと。

13 また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互^{たがい}に恕^{ゆる}せ、主の汝らを恕し

給える如く汝らも然^{しか}すべし。14 凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を

全^{まこと}うする帯なり。15 キリストの平和をして汝らの心を掌^{つかさ}とらしめよ、汝らの

召されて一体となりたるはこれが為なり、汝ら感謝の心を懐^{いだ}け。16 キリストの

言^{ことば}をして豊^{ゆたか}に汝らの衷^{うち}に住ましめ、凡ての知恵によりて、詩と讚美と霊の歌

とをもて、互に教え互に訓戒し、恩恵^{めぐみ}に感じて心のうちに神を讚美せよ。17 ま

た為^なす所の凡ての事、あるいは言^{ことば}あるいは行^{おこな}い、みな主イエスの名に頼^よりて

為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」（コロサイ3：1〜17）

と。全部、我々の必要なことを書いてくれているんですよ。

それから、4章へとびますけれども、コロサイ書4章は、

「自分のためにも祈ってほしい」

ということを言っている。パウロなんかは、放つておいても大丈夫かと。そうではない。
パウロは

「祈ってほしい、祈ってほしい」

といつも言ってますよ、信者たちに。

「²汝ら感謝しつつ目を覚して祈を常にせよ。³また我らの為にも祈りて、神

の我らに御言^{みことば}を伝うる門をひらき、我等をしてキリストの奥義を語らしめ

我々は伝道の使命があります。私は京都でも言ったんです、



「今年の共通の課題にしたいことは、一年に一人をクリスチャンにする。一年に一人にキリストを伝えること」

と。「一年に一人を」というのは、キリストの方に向きかかっている人をキリストへ本もののクリスチャンにする。何も

「自分の集会に来てくれ」

とかでなくていい。いい教会があれば行きなさい。とにかく、

「あなたは本もののクリスチャンになってほしい。もうこっちに向いているのだから」

と。一年に一人を本当のクリスチャンになっていただくように努力する。それから、まだ全然キリストを知らない方に、さ迷っている人にキリストを伝える。一年に一人に。だから、

「二年に一人を、一年に一人に」

これをみんながやったら、一年で倍になるわけです。そうでしょ。これは小池先生が言われたんです。まだ私が若い頃でしたよ。僕はその時に、

「へえ？ 先生、たった一人でもいいんですか、少なすぎるではありませんか？」

と。それが僕の正直な反応だった。僕はその頃、本当にトラクト「Tract」、宗教・政治を普及させるために使う小冊子やパンフレット」を持って、電車に乗っても配るとか——宣教師の所にしばらく居ましたから、宣教師はそんなことをいつも言うんですよ——だから正直に、病院に行って待合室で配るとか、そんなことをやっていただけども。

そんなことを別にやらなくても、小池先生は電車に乗って、新幹線で女の子が横に坐っていたら、まずチョコレートとかミカンを渡して、それから福音の話をする。あれは女の子だからなさるので、他のオッサンだったらしないよ、小池先生は(笑)。私の推定であります、証拠はありません。まあ余計なことを言いました。

パウロも、

³また我らの為にも祈りて、神の我らに御言を伝うる門をひらき、我等をしてキリストの奥義を語らしめ

私たちを通してキリストの奥義を語らせてほしいんだと。聞く耳を持たんやつがいっぱいおるから。まず聞く耳を持たせてほしい。そして、伝えたいんだと言っている。

⁴之を我が語るべき如く顕させ給わんことを願え、我はこの奥義のために繋^{つな}がれたり。⁵なんじら機^{おり}をうかがい、外の人に対し知慧^{ちゑ}をもて行え。⁶汝らの言は常に恵を用い、塩にて味つけよ。然らば如何にして各人^{おの}に答うべきかを知らん。」(コロサイ4・2〜6)

「釈迦に説法」ということか何かしりません、「豚に真珠」でも困ります。やっぱり、「この人には伝えたい、この人は救われてほしい」

という、そういう願いを持たせていただいて、もし長い関係が続くならね。電車の行きず



りの人ならしやうがないけれども、それなりの人なら、何か相談を受けるとか、何か機会があつたら、それをつかまえて、

「何とかどうぞ、この人をあなたのところへ。この人はいろんなことで今、悩んでいる。あなたのことは全然頭にありません。でも、この人を本当に救つてくださるのにはあなたしかありません。だからどうぞ、御言を私は伝えたい。そのためには、彼の心を耕してください」

と。善き地に落ちないと、実を結ばないでしょ。石地に落ちた種は枯れてしまいますね。「だからどうぞ、あの人の心を耕してください。私は御言を播きたいんです」と。そういう願いをもつてやるのが大事なんです。

その願いを持つことが大事なことがピリピ書に出てくる。ピリピ書2章13節に、¹³神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行わしめ給えばなり。

我々が志をたてないと、神さまは働こうと思つても働けないんですよ。まず私たちは志をたてる。

「二年の計は元旦にある」といいます。それで、皆さんに「今年の抱負は？」と聞いたんです。

「まず一年にキリストのために、神の国のために私はこれをさせていただきたい」と。そしたらここに、

志をたて、業を行わしめ給えばなり

と。そして、

¹⁴なんじら眩かず疑わずして、凡ての事をおこなえ。

「眩ぎ、疑い」これはマイナス要因ですから。

¹⁵是なんじら責むべき所なく素直にして、此の曲れる邪悪なる時代に在りて神の瑕なき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。」（ピリピ2・13〜15）

あなた方は生命の言葉を保ちて、世の光としてこの時代に輝いていると。

「汝らは世の光なり」

と言われた。キリストという光がうちに宿ると、あなた方自身が光になる。キリストはもう今、世にいらつしやらないから、我々がキリストの代わりにこの世に送り出されているわけです。

それから少し飛びまして21節、これがこの世の人の姿、へたしたらクリスチャンもこういう姿の人が多いかもれません。

「21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。

それに比べればテモテは素晴らしいと、テモテを褒めている。パウロはテモテを非常に大



事にしました。

22されどアモテの錬達なるは汝らの知る所なり、即ち子の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。」（ピリピ2・21〜22）

と言つて、もの凄く褒めています。エパフロデトも褒めています。

●ピリピ書第一章

ピリピ書を前のところから、ほんのエッセンスだけ辿っていきます。まず第一章では、ピリピの人たちはパウロの伝道をサポートしているということ。それに対する感謝を述べている。

「³われ汝らを憶うごとに、我が神に感謝し、⁴常に汝ら衆のために、願のつどつど喜びて願をなす。⁵是なんじら初の日より今に至るまで、福音を弘むることに与るが故なり。

だから、私は神さまに感謝して、あなた方のことも一生懸命に祈っているんだよ。それが3節から出てきます。

⁶我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、神さま、あるいはキリストの御霊が、

キリスト・イエスの日まで

最後の審判の時ですね、

之を全うし給うべきことを確信す。⁷わが斯くも汝ら衆を思うは当然の事なり、

その時まで完成してくださることを確信している。それは当然のことだと。

我が縲紲にある時にも、福音を弁明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵に与るによりて、我が心にあればなり。

そして、自分が縄目にある時も、フリーで伝道する時も、常にあなた方はみな私と一緒に恵みにあずかっているんだと。非常にピリピの人たちとの一体感というものがもの凄く表れているんです、パウロは。他の教会とは少し距離がありますよ。ところが、ピリピの教会とは一心同体だと言っている。

⁸我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋い慕うか、

あなた方は恋人だと。「恋い慕う」なんて言っている教会はありません、他には。ピリピの人たちに対してだけ、こうして非常に個人的な信頼、愛、そういうことを言っている。

その証をなし給う者は神なり。

しかもだからこそ、あなた方はやっぱり智慧において、祈りにおいて、高く深くなっほしい。ただ信じて喜んでいるレベルではなくて、もっともつと霊的に成長してほしいと。霊的成長を求めています。それはピリピ書もコロサイ書もエペソ書もみなそうですよ。エ



ペソ書では、

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかにばかりなるかを悟り」（エペソ

3・18）

とやっている。クリスチャンは信じて、

「あ、これでよろしい」

なんて、そんなレベルに留まっていたらダメなんです。いよいよ今度はもうキリストの凄さに圧倒されて、

「あ、あの人はもうキリストそっくりだ。あの人が語りだしたら、御霊の生命が流れてくるわ」

と、そういうふうになるように、キリストは願っていらっしやる。特別な人だけが伝道するのではない。皆さんそれぞれがもう伝道者なんです。道を伝える。キリストを証する。そういうことを願っていらっしやる。だから、

9 我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟さとりによりて弥いやが上にも増し加わり、
10 善悪わざを弁わえ知り、キリストの日に至るまで潔けがれよくして躓つまずくことなく、
11 イエス・キリストによる義の果を充みして、神の栄光ほまれと誉ほまれとを顕あらわさん事を。」（ピリピ 1・3～11）

それから、自分は囚われているけれども、これによってもキリストが崇められる、これでいいんだよと言って、次の20節、

「20 これは我が何事をも恥はじずして、今も常のごとく聊ちやうかも臆おそすることなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇あがめられ給わんことを切に願ひ、また望むところに適かなえるなり。」（ピリピ 1・20）

これがパウロの願いです。「自分の欲望を満たしたい」なんてことは全然思っていない。

「我が身を通してキリストの崇められ給わんことを」

と。私はすべてのクリスチャンがそうであってほしい。まずキリストです。福音書ではキリストは、

「まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、すべて必要なものは添えて与えらる。あなた方の義は学者・パリサイ人に勝らなかつたらダメだよ」

と、はつきり言っているでしょ。求めておられるレベルは凄く高い。その求めておられるレベルに合格しようと思つたら、それこそ肉の力ではダメです、生まれ変わらなないと。生まれ変わって、聖霊をいただいで、聖霊の人にならなと。ヨハネの手紙を見てごらん。

「あなた方には油注がれているから、人が教えてくれる必要なかない。御霊

自身みづかがあなた方をすべての真理に導く」（ヨハネ 1・20）

とヨハネの手紙に書いてある。すべてそうやって繋がっています。それから27節、

「27 汝等ただキリストの福音ふさむに相あひあはしく日を過あせ、



「クリスチャンらしく、神の子らしく生きろ。もう醜いアヒルの子ではないよ。あなた方は王子様だ、神の子なんだ。だから、神の子らしく生きようね」

と、こう言ってくれている。そうでしょ、キリストの福音にふさわしく生きる。だから、パウロにとつては、離れていても、またピリピの人に会うことがあるにしても、離れていても一緒にいるにしても、そんなものを乗り越えて、

さらば我が往きて汝らを見るも、離れて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦い、²⁸ 凡ての事において逆う者に驚かさねぬを知ることを得ん。

泰然自若^{たいぜんじじやく}としてほしいと。あなた方がどんなに迫害されようが、貶^{けな}されようが、何されようが、泰然自若^{たいぜんじじやく}としている。それが勝利だという。オタオタしない。泰然自若^{たいぜんじじやく}としている。

「神は我らの避所^{まげところ}また力なり、なやめるとき^{いと}の最^{たすけ}ちかき助なり」（詩篇46・1）

という詩篇46篇がここにちゃんと書いてあるでしょ。それがあなた方のはつきりした救い^{しるし}兆^{しるし}だ、彼らには亡びの兆^{しるし}だと。

その驚かさねぬは、彼らには亡^{ほろび}の兆^{しるし}、なんじらには救の兆^{しるし}にて、此は神より出づるなり。²⁹ 汝等はキリストのために奮^たに彼を信する事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜わりたればなり。」（ピリピ1・27〜29）

「ええことばっかりほしい」ではない。そんなのはあかん。キリストと運命共同体だ。愛する人と一緒ならどんな苦勞^{いと}も厭^{いと}いません。いい時も悪い時もどんな時にも一緒だと。

●ピリピ書第2章

2章にきたら、今度は兄弟姉妹の間のこと。この2章の通りやれば、集会は間違いない。多分、ピリピの教会も人数は多くなかったと思う。

「この故^もに若しキリストによる勸^{すすめ}、愛による慰安^{なぐさめ}、御霊^{まじわり}の交際^{まじわり}、また憐憫^{あわれみ}と慈悲とあらば、

あなた方にはこれらが充分あるんだから、

² なんじら念^{おも}を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思うことを一つにして、我が喜^{よろこび}悦^みを充^みしめよ。

そうやってくれるなら、私はうれしい。キリストも喜ばれる。

³ 何事^なにまれ、徒^む覚^かまた虚榮^むのため^にすな、おのおの謙遜^{けんそん}をもて互^たに人を己^{おの}に勝^かれりとせよ。

「誰が一番偉いか？」なんて、キリストの弟子たちも言っただけでも、ダメだよと。

「上に立とうと思う者は一番しんがりになりなさい。人の子が来たのも仕えるために来たんだよ」



と、そういうことをキリストは言われた。ここでも、

4 おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。5 汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。

キリスト・イエスの心を心としなさい、キリストと同じ生き方をしなさいと。

6 即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、⁷ 反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。

本来、神だった。神と共にいた方ですよ。ヨハネ伝第1章にある。「言は神なりき。言は肉体となつて、我らのうちに宿り給えり。律法はモーセを通してやつてきたけれども、恩恵と真理はキリストを通してやつて来た」とありましたね。そのことをここで言っている。

己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。

だからこそ、神はキリストを死につばなしにしておかない。天の高みへ引き上げられて栄光の姿に——ご復活ですね——現れた。当然のことなんです。キリストが死につばなしなら、それこそ本当に「神も仏もあるものか」なんです。でも、キリストはゆえあつて十字架で死なれた。我々の罪を全部背負つて、死をも滅ぼしてくださつた。そして、仕事を、御業を果して、

「よし、これで御業がなつた。さあ、栄光の姿で現れなさい」

と。誰一人できないことですよ、キリストと同じあの贖罪は。キリストだからできたことで、我々罪びとが十字架にかかつたつて、どうしようもない。当たり前なんです、自分らは十字架につけられて当たり前なんです。強盗が言いましたね、

「我々は十字架につけられて当然だけれども、このお方は違うんだ。御国にお入りになる時には私のことを思い出してください」

と言つたら、キリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

と言われた。ああいうことですね。十字架の死に至るまで従い給えり。だから神は彼を最高のところへ引き上げられる。

9 この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜いたり。10 これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉くイエスの名によりて膝を屈め、11 且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。」（ヒリピ2・1〜11）

すべてのものがキリストの前に平伏す。膝をかがめ、「イエスは主である」と言い表して、栄光を父なる神に帰する。キリストを崇めること、キリストに感謝することは即ち、キリストの背後にいらつしやる神さまに感謝することになる。だから、キリストの背後に父なる神がいらつしやる。我々はキリスト抜きでいきなり



「お父さまー」

ではないんです。だから、小池先生は、

「主さまー」

と祈られる。「主さま」と祈ったら、その背後にいる神さまは

「ああ、よしよし」

と、全部通じてきているから、そういうことなんです。一般の教会はそうではなくて、父なる神に祈って、

「キリストの御名により」

と最後にちよこつとキリストが出てくる。あれはおかしい。我々にとってはキリストさまがすべてなんです。キリストさまを崇めるといふことは父なる神を崇めること。キリストに感謝することは、キリストをくださった神さまに感謝すること。キリストの背後に神さまがおられて、それがもう一心同体なんです。でも、我々はキリストを通して神に至る。

「われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし」（ヨハネ14・6）

と言われた。だから、我々はどこまでも「キリストさま」なんです。キリストに祈り、キリストに従い、キリストがすべてのすべてです。

「キリストにはかえられません」という聖歌〔521番〕がありますね。

やっぱり、クリスチャンはキリストです。世間は、「神さま」といつたらまだ我慢する。「キリスト」といつたら嫌がる。私の経験です。だから、賢い人は「キリスト」の名を出さない。「神、神」と言ってます。「神さま」と言っておけば無難なんです。「キリスト」と言ったら勝手に嫌がられる。これは私の経験ですよ、皆さんはそういうことを味わいませんでしたか。味わっていなかったら、まだまだ修行が不足です（笑）。

「キリストと共に苦しむことも賜りたればなり」

「もし子ならば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」（

ロマ8・17）

という。すべて自分を通して実験してください。ヒルティも

「やってみなはれ！」

と言っている。自分で全部味わいなさいと。

「天道地路」

と、小池先生は言われた。天の道に即して地路がある。「路」は足偏に「各」と書く。「道路」というのがそうだ。道は天道でしょ、路は各々の足と書いてある。だから、「道路」というのは素晴らしい言葉なんだ。天道に即して地路を歩くという。



「私は道路になりたい。私は道路です」
なんて。

「この人はおかしいな」

「いや、おかしくない。道に従って各々の足で歩いて行く。だから、道路は私のモットーです」

と、そういうことを思いますね。

●ピリピ書第3章

それからピリピ書第3章にきたら、「喜べ、喜べ」ということを言っています。

「²なんじら犬に心せよ、^あ悪しき^{はたらきびと}労働人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。

と。偽善者、偽善的クリスチャンがたくさんおられます。そんなものを警戒しろと言っている。自分がかつては、

⁶熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。⁷されど^ま曩に我が益たりし事はキリストのために損と思ふに至れり。

「チャンピオンだったけれども、そんなものはかなぐり棄てて、キリストだけだ」というのが3章の宣言です。かつては、自分にとってプラスと評価していたものが、全部今はマイナスだ。キリストを受けとる邪魔になると。

⁸然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの^す優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を^{ちりあくた}塵芥の如く思ふ。

既にキリストを信じたことよって迫害を受け、多くのものを失った。しかし、そんなものは何とも思っていないと。

⁹これキリストを^え獲、かつ^{おきて}律法による己が義ならで、

律法は「己が義」を与えるんです。

「自分はやりました!」

と、パウロは当然自分を誇るわけです、律法を全うしたら。そしてやってない奴を審く。パウロはそれをやっていた。ところが今度は、そんな律法による己が義なんてものではないと。ただキリストを無条件にいただく。無条件にいただくのを「恵み」といいます。「報い」というのは褒美なんです。働いたことに対して報酬が払われる。

「律法を実現しました。だから、報酬として天国をくださいな」

と。これが律法の行き方ですよ。そうではなくて、もうそんなものは棄てて、

唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜わる義を保ち、

獲得する義ではない。「律法の義」は、自分で獲得する。自分を誇る。やってない奴を審く。



そうじゃない。「賜る義」だという。

「私はふさわしくありません。でも、ふさわしくない人間を天国人にしてください。ありがとうございます」

と。どこまでも謙りしか出てこない。小池先生はそれを「無」と仰った。

「無者にされる。十字架でゼロにされている。十字架で本当にゼロにされている人には無限無量が入ってくる。それが聖霊である」

と。だから、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、復活のキリスト、御霊のキリストがわがうちに在りて生き給うなり」

と。そういうことになるわけです。それがここでピリピ書で言っていることなんです。

信仰に基きて神より賜わる義を保ち、キリストに在るを認められ、¹⁰キリスト

とその復活の力とを知り、又その死に効いて彼の苦難にあずかり、¹¹如何に

もして死人の中より甦えることを得んが為なり。

だからこれは、パウロは、「生きながらキリストと同じ姿でありたい。死んでキリストと同じ復活の姿で現れたい」と。それくらい彼はもう、

「キリスト、キリスト、キリスト。いかにもして死人のうちより甦らんことを得んがためなり」

と。そして、「それはもう実現したよ、全うせられたり」なんて言っていない。

¹²われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追い求む。

追求無限です。

キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。

キリストに捕まえられてしまっている。

よく、私は小学校のころ、大和川という川へ連れて行かれて——禪一丁なんです——先生は、お尻の後ろの禪の閉じてある所をつかまえて、ポーンと水の中へ放り出すんです。バタバタとあややつて泳ぎを覚える。ここに

「キリストは捉えたまえり」

なんてあると、我々は禪を捉えられてポーンと海に、聖霊の海へ放り込まれて、

「ああ生命だったー!」

と。そんなことを連想させられる。

「キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり」

と。キリストに捉えられていますから、キリストに捕まえられていますから、

「はい、キリストに捕まえられて、キリストは生きてます」

と。そうでしょ。



「我を食らえ、我を飲め」

と言われたでしょ、ヨハネ伝6章で。

「私を食べ、私を飲まなければ、あなた方に生命はないよ」

と言われたでしょ。あの6章で本当にくだいように、

「我は生命のパンなり。モーセはマナを与えたが、みんな死んだではないか。でも、私というパンを食べてごらん、死なないよ」

と、繰り返し繰り返し言われた。そして、

「活かすものは霊であつて、肉は役立たない。私の語った言葉は霊であり生命である」

と。もうヨハネ伝は霊の次元と肉の次元とはつきりしてますからね。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもって拝すべきなり」

と。ヨハネ伝は本当に神の霊の次元と、肉の次元とのコントラストがはつきりしてます。

¹³兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、

と。ところが、もう少しいきますと、

¹⁸そは我しぼしぼ汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。

と。この世はそうですよ、今だつて。「神さま」と言つたらまだ我慢してくれるけれども、「キリスト」と言つた途端にもうそっぽを向くわけです。

¹⁹彼らの終は滅亡^{ほろび}なり。

自己責任ですから、放つておけば滅びなんです。播いた種を刈り取る。それはやっぱり、刈り取つて滅びてほしくないから、我々はお節介^{せつかい}だけでも、「キリスト、キリスト」と言つている。嫌がられながらも、やつているわけですよ。

だから、嫌がられながらやつている。この世だけと接していると、嫌な思いをする。それで、聖書に帰ってきたら、

「あ、これでいいんだ、これでいいんだ」

と、そういうふうには、本当に聖書の中に戻ってきたら、

「ああ、ここが私の住処^{すみか}だつた」

という気持ちにしてくれるんです。聖書を離れて伝道活動なんかやっていたら、ちょっと危ないですよ、それは。やっぱり絶えず聖書というその故里^{ふるさと}に帰つてこないよ、その泊まれる場所に。外へ出かけて行って、電車は車庫へ戻ってきますね、みんな。それと一緒に、出て行つたら、必ず戻つて来て充電していただかないといけない。そう思います。

¹⁹彼らの終は滅亡^{ほろび}なり。おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事^{おも}のみを念^{おも}う。



そういうのがいっぱい居りますわ、この世のお金持ちは。だいたいこの世でお金が儲かるというのはおかしい。正直にやっていたら、みな税金で取られてしまう。何かどこかに隠したり、ずるいことやっている。ゴーンさんはどうか知りませんよ、ゴーンとか鐘が鳴っているわ（笑）。

おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念う。こういうことをやっている実業家が多い。アメリカは割合に、儲けるけれども、

「それは神のために」

というのが何人か居る。そういう人たちは奨学金を与えて、例えばフルブライト留学生に日本人をたくさん呼んでくれている。やっぱり向こうは善玉と悪玉が両方共存してます。今はどうか知りませんよ。でも、かつては、アメリカは非常に自由で、善玉と悪玉が共存していて、我々は善玉によつてずいぶん日本人の研究者は助けられたはずです。ロックフェラーだとか、カーネギーだとかいろんな大金持ちが、それを世のため人のために使ってくれるわけです。そういう大金持ちが日本には少ない。せいぜい松下幸之助とか稲森財団の稲森さんとか、何人かはいても、そういう志を持っている実業家というのは残念ながら少ない。やっぱりクリスチャンの国とそうでない日本との違いかもしれません。

20 されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。

これは再臨のキリストを待っているわけです。

21 彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、

己が栄光の体に象らせ給わん。」（ピリピ3・2～21）

凄いでしょ。

「皆さんは、あなた方の本来はこれなんだ。あなたはこういうもんですよ。だから、

喜べ、喜べ」

と、こうなってくる。こんなに素晴らしいことを約束してくれているんですよ。

「あなたは白鳥なんです、もう醜いアヒルの子ではないんですよ」

と。そうですね。

「彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、

己が栄光の体に象らせてくださる」

そういう希望を与えてくださる。

●ピリピ書第4章

ピリピ書4章に行くよ、

「この故に……主にありて堅く立て。」

と。4節に、



4 汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。
喜ばないでいられましょうか、という感じですね。

5 凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。
身近にいてくださる。聖霊となつてキリストは身近にいてくださる。

6 何事をも思い煩うな、
だから、何事も思い煩う必要はないよと。マタイ伝でも、

「汝ら思い煩うな。まず神の国とその義とを求めよ。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる」（マタイ6・33）

とありますね。ここにもちゃんと、

何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求
を神に告げよ。

感謝してあなたの方の求めるところを神さまに、キリストに語り告げなさい。そうしたら、
7 さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、
人がくれる平安というのは一時的です。神の平安は揺るがない。

汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。終に言わん、兄弟よ、
凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡
そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳いかなる誉にても、汝等こ
れを念え。

これが大事なんです。へたするとクリスチャンは他宗排撃をする。

「私たちが正しくて、他はダメだ」

というのが多いけれども、およそ真理ならばこれを受け入れる、あるいは評価する。ダメなものはもちろんダメですけれども。真理にかなうものならば受け入れる。そういう広やかさ、これは小池先生はお持ちでした。非常に仏教の方にも造詣が深かった。ああいうには私は本当に感動しました。

宣教師の狭い世界で呻吟していた私を解き放ってくれたのが小池辰雄先生で、1959年でした。僕は1956年にクリスチャンになって、その時は宣教師の導きの中にあつたものですから、どうしても狭い。ところが、59年にエマオ会主催でキリスト講演会を京都大学でやった「演題「無的実存」1959年11月9日、楽友会館にて」。そしたら、こんな素晴らしい自由自在な、こんな世界があつたんだと思って、本当に感動しました。150人くらい、いろんな人が来てました。普通の何かお茶を売っているおばさんが、

「今日はいいい話を聞いた!」

とか言つて顔を輝かせておられたのを見ました。あれが私と小池先生の出会いの一番感動的な場面だった。その前の晩はやっぱり小さな集まりをやってくださった。その時は、まだそれほど私はピンとこなかったけれども、講演会で一般大衆を前にして話された時に、



本当に凄いなと思った。それが1959年でした。だから、このパウロが、

「狭い見ではダメだよ、およそ素晴らしいものがあつたら褒めなさい」

と。よく小池先生は、棟方志功のことを『芸術のたましい』で書いておられるでしょ。

「私は自分の作品に責任を持たん。板画は板画をひとりで書いておられるでしょ。板画のためには、私は鬼にも蛇にも神にもなれる。自分は自分の仕事に責任を持たん」

〔註…〕……板画がひとりで板画をなして行く、板画の方からひとり作品になつて行くというのでしょうか。……板画が板画を生んでいる、そういうありさまを、わたくしは非常に大事だと思うのです。わたくしは、自分で板画をやっていますから、板画のことになると、鬼にもなり、蛇にもなり、仏にもなり、神にもなつてもらいたいのです。わたしの板画にそういうものを表現してもらいたいのです。自分でするのではなく、してもらいたいのです。ですから、わたくしがした仕事ではなく、板画がした仕事になつてもらいたいのです。……〔『芸術のたましい』／芸術のたましい／棟方志功より〕

と言っている。小池先生はそれを非常に高く評価されました。小さな自分から出てくるものは大したことはない。それを超えた何ものかに導かれてやっている仕事でないと本ものではない。それが「上からの力」による仕事ですね。先生は、「自分の詩というものは全部そういう力に委ねてやっていくんだ」ということを言われたわけです。そういうことがここにちゃんと書いてある。

それから更にいきますと、

11 われ窮乏ともしびによりて之を言うにあらず、我は如何なる状さまに居るとも、足ること
を学びたればなり。

〔わたしたたるををしる〕
「吾唯知足」という言葉が何か京都のお寺にあるんですね。〔註…京都の龍安寺にこの文字が掘られたつくばいがある〕

12 我は卑賤いやしきにおける道を知り、富における道を知る。また飽くことにも、飢うるこ

とにも、富むことにも、乏とほしき事にも、一切の秘訣を得たり。

もう自由自在だと。

13 我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリピ4・1～13)
と言っている。

こんなふうには、ピリピ書というのは非常に私たちに身近なんです。ですから、ピリピ書を通してパウロが願っていてくれることは、即ちキリストが今も私たちに願っていてくださることだと、そういう思いがします。こういう角度から福音書の言葉を読むと、

「そうだ、そうだ。ピリピ書でここに言われているのは、福音書ではここで言われている」

と、そういうふうには全部つながってくるんですよ。それから、キリストは詩篇を愛読しておられた。だから、詩篇の願いは全部キリストが成就しておられる。



「詩篇であなたは嘆いていたね、その嘆きは私が引きとった。そして、あなたの嘆きを喜びに変えるよ」

と、そういうふうにはキリストは、詩篇の祈り、嘆き、苦しみ、それを全部引きとって、答えを与えておられる。私はそう思います。だから、私の文語の聖書は不思議に『新約聖書詩篇付き』となっている。あれはやっぱり素晴らしいなと思いました。どういう意図でやったか知りませんが、ルターは、

「詩篇は小さな聖書である」

と言う。詩篇にはいろんなものが入り込んでいる。歴史も入ってますし、救いのこと、祈りのこと、嘆きが入っている。その詩篇の祈り、嘆きを全部キリストは引きとって福音として語っていらっしやる。そんな感じですね。

●聖書と一つになって欲しい

まあしゃべりだしたら、切りがないから、これで終わりますけれども。とにかく、お願いしたいことは、聖書と一つになって欲しい。

「聖書は私が言いたいことを全部書いてくれている。聖書から学ぶのではない。私は聖書です。私は自分でうまいこと言えないけれども、聖書に全部書いてある。聖書は私のことを代弁してくれている。だから、私を知ろうと思ったら、聖書を読んでもください」

「どこに書いてあるの？」

「あんた、読んでないね！」

なんて(笑)。皆さん、本当にそうやってほしいんです、一年かかって。今、正月に願いを立てて、クリスマスになって、

「はい、二分ほどできました。その続きはまた来年に」

と。それでも結構ですよ。人生百年時代でしょ、まだまだ先がありますね、皆さんは。私はあと14年くらいしかありません、100歳まで。でも、まあ皆さんはもうちよつとありますからね、その間に本当に――

「聖書は私のことを証している。旧約聖書は私のことを語っている」
と、キリストは言われた――今度は、

「新約聖書は私のことを語っている。私が如何なる者かということは新約聖書に全部書いてある。私を知りたければ、本当に聖書を読んでください」

と。そのぐらいに、皆さん、胸を張って告白していく。パウロは、

「われ福音を恥とせず」

と、言いましたよ。

「¹⁶我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信



ずる者に救を得さす神の力たればなり。」（ローマ1・16）

と。福音を恥とするクリスチャンはたくさんおりますよ。仲間の中ではしゃべるけれども、人の前ではキリストを告白しない。ダメなんです。私は、

「就職したら、自己紹介する時にまず、自分はキリストを告白しなさい」

と言う。その時に告白しておいたら、いろいろザワメキがあっても、あと楽だよ。それ
でなかったら、

「いつ告白しようか、いつ告白しようか」

と、絶えず苦しい。私の経験からしてもそうです。だから、まず自己紹介の時に

「私はこういうものです。育ちはこういうところで育って、どここの大学で勉強

して、こういう会社から来ました。でも、それは私の外側であって、内なる私は

キリストによって生まれた人間です」

と、はつきり胸を張って言う。やはりそれくらいの自己紹介をやってほしいなと思う。皆

さんはもう、そういう機会はないかな。でも、そのぐらいは、みな若い人にも伝えて、

「この世なんて大したことはない。神の国はこの世に切りこんできている。キリス

トは向こうからこつちに来た。今も来ている。私はそれを告白している」

と。それが本当に、聖書を読んでいるということなんです。キリストと一つになっていく。

キリストが応援してくださる。では、この辺で終わります。

